

=市史編さん便り= 【26号】 令和4年8月8日(月)発行.

\*\*\*\*\*土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

## 県立公文書館で「学校資料から見える世界」

と題して企画展を実施中!!(～9月26日まで)

○8月21日(日)14:00～15:30 高知県立公文書館2階研修室

○演題「学校日誌と学校文集-土佐清水市立大津小学校を事例に-」

○講師 高知城歴史博物館・渡部 淳 館長

○要申込：高知県立公文書館へ（TEL、FAX、メールにて）

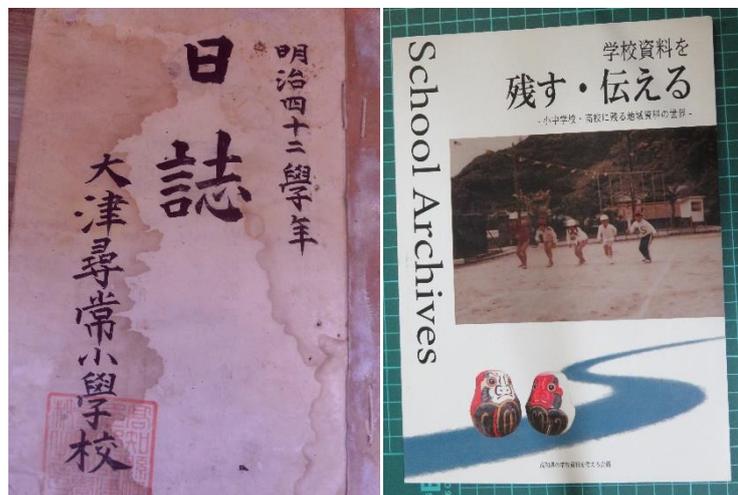
高知県立公文書館は、旧県立図書館であり、高知城追手門の近くです。

先日8月4日の高知新聞朝刊25面に「学校資料保存県内に広がる」との見出しで、過疎化により休校や廃校が進む県内において消失しつつある学校資料の保存・活用についての記事が掲載された。

この記事は、高知新聞本局山崎彩加記者（前高知新聞清水支局長）によってまとめられた記事である。山崎記者は、「高知県の学校資料を考える会（目良裕昭代表）」「土佐清水市郷土史同好会（武藤清会長）」「土佐清水市教育委員会生涯学習課（市史編さん室）」が協働で取り組んだ旧土佐清水市立大津小学校の学校資料の保存・活用の取り組みを紹介し、これを皮切りに室戸市や幡多郡大月町等でもその流れが広がっていることを紹介し、学校資料の保存活動の運動が公的に取り組まれつつある動きを俯瞰的に捉え、紹介している。

この記事の事前取材が市史編さん室にあり、その際に「近代から現代にかけての地域資料は極めて少なく、地域の文化活動の拠点であった小中学校等の地域資料は歴史資料として大変重要である」ことを述べさせていただいた。また、「近現代史や学校教育史等の研究は、県内では意外と研究者も少なく、進んでいない現状もある。このままでいけば歴史の空白を生みかねない実情がある」こともお話をさせていただいた。土佐清水市は、今後の保存・活用に課題は残るものの、「高知県の学校資料を考える会」の目良裕昭代表、楠瀬慶太氏、高木翔太氏をはじめ、会に所属する県内学芸員有志の皆さんたちのご尽力により多くの貴重な資料をレスキューすることができた。

これから学校の統廃合がますます進み、休校・廃校が多くなれば、多くの有益な貴



重要な資料が消失することは県内の他の地域においても明らかである。少しずつでも資料のリスト化を図り、記録保存していくことが急務である。

**8月27日(土) 10:30~12:00**

## 「土佐清水市立市民図書館歴史講座」

演題 『中浜東一郎日記』 から見た万次郎

講師 生涯学習課市史編さん室長・田村公利

**※まだ若干の空きがあります。急いで申込みを！**

(tel. 0880-82-4151)



### 【編集後記】

この間、梅雨があがったと思えば、先日8月8日で暦の上では、早「立秋」となりました。まだまだ盛夏の真っ只中ではありますが、秋は着実に近づきつつあります。ご存じのとおり、「立秋」は1年を春夏秋冬に分け、さらにそれを6時季に分割し、それぞれに名前をつけたものです。例えば、秋は「立秋」「白露(はくろ)」「秋分」「寒露(かんろ)」「霜降(そうこう)」の6時季に別れます。

「立秋」といえば、最近「アブラゼミ」「クマゼミ」の鳴き声の他に「ツクツクボウシ」の鳴き声を聞くことがあります。秋は、確実に訪れつつあることを証明してくれているようです。セミの一生は七日間と言われ、とても短いように思われがちです。しかし、幼虫時に地中で7~10年過していることを忘れてはなりません。

話は変わりますが、先月米国オレゴン州ユージンで開催された世界陸上の模様はTVやネットで日本人選手の活躍の様子が紹介されました。個人的に女子やり投げをTV中継で見えていました。北口榛花選手が63メートル27で見事銅メダルを獲得する勇姿を見ることができました。世界陸上のヒノキ舞台に立つことは、いわば一瞬です。その舞台に立つまでの見えない部分での北口選手の血の滲むような努力が恐らくあったことでしょう。これはセミの一生に通じるものがあります。

『新市史』執筆も同じだと思います。『新市史』に執筆しているエキス部分は編集委員及び執筆協力員、調査協力員各位の目に見えない影の努力があってこそ成り立ち、引き立っているのだと思います。いよいよ「通史編」は完結が近づきつつあります。最後の最後まで執筆・校正をよろしくお願いいたします。

残暑が厳しい毎日です。水分補給をまめに。夏バテ等にも十分ご注意ください。編集委員・執筆協力員・調査協力員各位のご健勝をお祈り申し上げます。(田村)